

# 土下座を解く



*In the world but not of the world*

永田円了

## なぜ日本人はすぐ謝るのか

我々日本人はいつも謝っているように見える。電話をしながらも、1分間に20回以上も頭を下げている（TV「特ダネ」より）。関西ではお釣りを出すときにさえ、「すみません」と言う。女性の会話で「先日はご免なさいね」から始まるのもおなじみである。

著名人の謝罪会見で必ず飛び出すコトバは、「世間をお騒がせして申し訳ありませんでした」「皆さまに、たいへんご迷惑をおかけいたしました」。いったいどんな風に世間をお騒がせして、迷惑をかけたというのか。以前に通訳の仕事をしていて、このフレーズだけは英語に訳すことができなかった。欧米にはこの発想がないからである。

世間をお騒がせしたことが、なんで謝らなければならないのか。不倫をしたことが、どうして皆さまに迷惑をかけたことになるのか。つじつまが合わないので訳すことができないのである。そもそも世間とは何なのか。

## 日本人にとって“世間”とは

日本人にとって世間とは、所属する集団、目に見えない縛り、これなくしては生きて行けないと思っている世界のことである。したがって、世間から外されることが何よりも恐いことなのである。のけもの、村八分、破門、島流し、などなど世間から外されると、我々は生きていく場を失うことになる。



そうならないために、私たち日本人はせせと謝りの儀式をするのである。そう、これは儀式なのである。なにも本当に心を込めて謝る必要はない。もくもくこの謝罪の儀式をすることによって、仲間はずれにならないようにしているのである。一種のおまじないと思えば分かりやすい。自分は悪くないと心の中では思っている、とりあえず大急ぎで謝罪し、「世間」の「ゆるし」を乞うのである。

## 日本人が 脱皮していくためには

世間という見えない縛りを解くためには、個が強くならなければならない。昔ながらの世間の枠の中で右往左往しているのは、世間の枠の強さに対して、個の枠があまりに弱く、対人関係があたかも納豆のようなネバネバしたものだからである。自分が生まれ育った集団をもう卒業しよう。今まで育ててもらったことには充分感謝して（謝罪ではなく）、次のステージに脱皮しよう。

周囲の空気確かめながら態度を決めるのではなく、「私」個人が単独者として意志決定をして行く。世間のウチとソトを自由に入出りできる存在になっていくこと。出る杭はうたれる、しかし出すぎた杭は打たれない。

### <事例 DVD>

テレビドラマ『半沢直樹』土下座のシーン/やられたらやり返す、10倍返し  
クローズアップ現代「氾濫する土下座」/謝罪コンサルタント会社登場  
謝罪会見/市川老蔵、酒井法子、ものもんだ、舟場吉兆、阪急阪神ホテルズ  
謝罪会見/タイガー・ウツ “私は不倫をしました”、前園元サッカー選手  
第一フェーズ/白い巨塔より、東教授の総回診  
森達也/世の中の不安と恐怖が異端を排斥しようとする  
ニュールンベルグ裁判より/ヤニングスの証言、当時のドイツは異端を排斥、  
やなせたかし/アンパンマン/子どもにも大人のコトバで、  
映画「リトル・ミスサンシャイン」/子どもにも同等なコトバで対応  
映画「海へ」/少女と老人の会話との平等な会話  
大河ドラマ「天地人」/直江兼続、身分は違えど 秀吉と同等に立ち向かう  
大河ドラマ「龍馬伝」/龍馬、世間のウチとソトを自由に生き来できる人  
歌・絢香 / I Believe



坂本龍馬